

■ 学校の共通目標

授業作り	重点	中間評価	最終評価
授業作り	・「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、各教科において ICT も活用しながら、双方向のコミュニケーションのある授業を目指す。	・ ICT を活用して授業を行う時間が増えている。教員主導での活用がまだまだ多いため、e ラーニングサービスを活用した協働学習の実施に努める。	・分散登校になったことで、タブレット端末の活用がライブカメラによる活用に限定されたこともあるため、e ラーニングサービスを活用した協働学習の取組の充実は、今後も課題である。
環境作り	・授業を通して、児童が夢中になって学びの対象に関わり、「聴く」こと、「考える」こと、「表現する」ことの3つに重点をおきながら、自分の考えをもつことができる授業づくりを目指す。	・「聴く」こと、「考える」ことについては、各学年で授業実践により、自分の考えをもてるような場面設定を継続して作れるようにする。	・自分の考えをもつ授業づくりは、ミライシードやオクリンクを活用して、自分の考えを表出する授業づくりに挑戦する教員が増えているので、今後も継続していく。
	・クラスの中で、一人ひとりの児童が安心感と他者への信頼を実感できる学級経営を目指す。	・個別の課題に応じることで、引き続き、一人ひとりが安心できる学習の実施に引き続き取り組む。	・一人ひとりの児童が安心感をもてるよう個に応じた指導を各学年・学級で取り組んでいる。学習の定着度には個人差があるので、次年度への引継ぎを確実に行う。
	・児童にとって見通しのもてる授業設計と、それを可能にする教室環境（ユニバーサルデザインの視点）を整備する。	・身に付ける力、そのための取組を引き続き、意識した授業設計を行うとともに、学んだ履歴を残るよう振り返り活動に力を入れていく。	・めあてを意識した授業づくりが実現できるよう継続していく。キャリアパスポートを活用するなど、自らの学習の振り返り活動が定着できるよう努めている。

■ 学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10月）	課題（10月）	改善のための取組（10月）	最終評価（2月）
1	国語	学 平仮名や片仮名については、正しい読み書きができるようになってきた。長音、拗音、促音、撥音、助詞の「は」、「へ」及び「を」を文の中で正しく使うことや原稿用紙の使い方については個人差があり、指導が必要である。 学 姿勢を正しくすること、「話し方名人」を意識することができており、はっきりした発音で話す習慣が身に付いている。一方、聞く力に課題のある児童がいる。 学 本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読むことができています。一方、文章を書くことに課題がある。	・正しい文字の形を捉えて書くことや正しい筆順で書く意識をはぐくむとともに、長音、促音、拗音、撥音、助詞の使い方や片仮名が正しく読み書きできるようにする必要があります。 ・大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くことができるようになる必要がある。 ・経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めることができるようになる必要がある。	・日常的に書く活動を取り入れたり、ワークシートを使ったりするなど、正しい文字を書くための練習を行う。また、授業中やテストの時に見直しの習慣を身に付けさせ、年度末までに全員が正しい文字を9割以上書けるように繰り返し指導する。 ・聞く力を高めるために、毎日の朝のスピーチや帰りの会で「いいところ発表会」を行うなど話を聞く経験を増やす。 ・書こうとする題材に対して、必要な事柄を集めることができるようにワークシートを工夫し、年度末までに全員が「1年生の思い出」の題材で300字程度の作文を書けるようにする。	・特に国語や特別の教科 道徳、生活の授業や学年行事・学校行事で、活動後に感想を書き、記録する活動を継続して行った結果、8割以上が長音、促音、拗音、撥音、助詞の使い方や片仮名を正しく読み書きできるようになった。漢字の学習ではタブレットのドリルパークを活用し、正しい筆順を学習させることができた。 ・日々の授業やスピーチ、発表会、行事、百人一首などで、「指示を聞く」、「友達の話を聴く」、「耳を澄ませる」といった経験を重ねた。その結果、「大事なことを落とさないように聞く」ことができるようになった児童が8割以上になった。今後も継続して聞く力を付ける指導をしていく必要がある。 ・運動会や遠足の振り返りで定期的に作文を書かせた結果、全員が「1年生の思い出」の題材で300字程度の作文を書けるようになった。書くことに苦手意識のある児童には、引き続き個別支援を行う。
	算数	学 加法や減法の計算は個人差があり、指導が必要である。問題文において演算を決定する能力を伸ばす必要がある。 学 「どちらがおいしい」「かたちあそび」の学習では、直接操作する活動を通して、比べることの理解が深まり、量感が育ったが、その場限りの学習で忘れてしまい、身に付かない。	・加法、減法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすることができるようにする必要がある。 ・日常生活でも、さらに量感を育てるための経験ができるように、指導していく必要がある。	・問題文において演算を決定する能力を伸ばすために、自分で文章題を作るなどして加法、減法が用いられる場面を想像したり、言語化したりして、実生活に結び付けた学習活動を多く取り入れる。 ・日常生活でも児童の量感を育てることができるように、具体物の操作によって直接比べる体験活動を積み上げ、学習内容の定着を図る。	・タブレットのデジタルドリルを活用し、問題文を繰り返し解いたり、自分で文章問題を作ったりする活動を行ったことで、演算を決定する能力や文章問題を解く力を伸ばすことができた。 ・学習内容の定着を図るために、今後も実生活に結び付けた学習活動を取り入れていく必要がある。 ・具体物（算数ブロック・おはじき・数え棒）を使った学習と動画教材を取り入れることで理解が深まった。算数の時間だけではなく、生活科、学級活動での係活動の時間、お楽しみ会の準備の中で担任が日常的に「長さ」「形」を意識させることで、算数で学んだ学習内容のさらなる定着を図る。
学年	教科	学習状況の分析（4月）	課題（4月）	改善のための取組（4月）	中間評価・追加する取組（10月） → 最終評価（2月）

2	国語	学 平仮名や片仮名については、正しい読み書きができるようになってきた。拗音や濁音については、個人差がある。 学 姿勢を正しくすること、相手を見て話を聞くこと、大事なことを落とさずに聞き取ることができるようにする。	・読み書きができるようにするために、正しい文字の形を捉えて書くことや正しい筆順で書く意識を形成する必要がある。 ・日常生活において、相手に自分の考えを的確に伝えるために、促音、拗音、片仮名が正しく読み書きをできるようにする必要がある。 ・実生活の場面において、分かりやすく伝えるときとともに、聞き取りやすくするために、「話すこと」の基本的な習慣とルールを身に付ける必要がある。	・漢字ドリルや書写のプリントを使い、正しい文字を正しい筆順で書くための練習を積み重ねる。 ・文字を一定の速度で、丁寧に書けるよう、視写に取り組み、読み返しをしてから提出させる。また、日々の国語科だけでなく各教科等において、漢字、片仮名、促音、拗音の正しい使い方を指導していく。 ・スピーチを取り入れたり、話型を用いたりして人の前に立って丁寧に話したり、聞き取ったりする力を身に付けることができるよう指導する。	・字形が合っていればよいと感じている児童が多いので、正しく丁寧に書けているものを例示し、正しい筆順は字形にも関係してくるという点について指導する。 ・視写では、平均して10分で160字を超えるようになってきた。慌てずに書くこと、読み返しをすることを徹底する。「てにをは」や「カタカナ」が身に付いていない子については、書いたものを友達にも見てもらい、お互いに学び合うことができるようにする。 ・7月より朝のスピーチに取り組んでいる。また、タブレット端末を用いてスピーチを行ってきた。児童の話すことへの抵抗が少なくなった。大事なことを落とさず聞き取ることができるようにするため、話の内容に沿った質問をすることや、話を広げていく質問をすることなどを指導する。	・書写のプリントや、ドリル「うつし丸くん」を活用し、書き順や字形を整えて書く時間を確保したことで、丁寧に字を書くこととする姿勢が出てきた。しかし、意識しないときできないため、普段から丁寧に書けるようノートへの指導も継続する。 ・視写の取組を通して、正しい表記の仕方を身に付けることができた。書いた文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文の続き方を確かめたりするよう、視点を示しながら児童同士でお互いの書いた文章を確かめる活動を継続して実施する。 ・スピーチの活動を継続して行ったことで、自由に話す意欲が高まった。今後は話題を提示し、それに合う内容を考えて話す経験を積ませたい。また、3割程度の児童が発表内容に沿った質問をできるようになった。
	算数	学 加法や減法の計算は、個人差がある。 学 「どちらがおおい」「大きな数」「かたちづくり」の学習では、直接操作する活動を通して、比べることの理解が深まり、量感が育ってきている。	・加法、減法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすることができるようにする必要がある。 ・日常生活でも、さらに量感を育てるため、操作活動を継続する必要がある。	・自分で文章題を作るなどして加法、減法が用いられる場面を想像したり、言語化したりして、実生活に結びつけた学習活動を取り入れる。 ・時計を使った学習活動や定規で測ったり、線を描いたりするなどの活動を十分にを行い、日常生活で必要な量感を養う素地を作る。	・端末で身の回りの事象を撮影し、問題作りに生かした。こうした活動を重ね、身の回りには算数的な場面があふれていることに気付かせる。 ・定規でまっすぐ引けずに図形が歪んでしまうことがあったため、算数に限らず、様々な教育活動の場面において、定規を使うよう指導する。単位の指導については、タブレット端末のデジタルドリル等を活用し、さらに復習をさせていく。	・タブレットを使った問題作りや、場面を式で表す指導を繰り返し行ったことで、7割程の児童がテープ図を使って問題場面を表し、正しく立式ができるようになった。しかし、文章題に出てくる数値を順番に立式すればよいと考える児童もいるので、問題場面を絵や図に表するなど、問われている内容を整理するための指導を継続する。 ・算数以外の教育活動でも、意識して定規を使わせたことで、直線を引くことがる児童が増えてきた。時計を常に置き、活動の際意識させたことで、時間の感覚が身に付くとともに学習内容の理解が深まった。 ・1学期の単元終了後もデジタルドリルを活用し、定期的に復習させたことで、3学期の長さの単元では8割の児童が場面に合わせてcm、mm、mを選ぶことができた。
3	国語	調 新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ったが、「書くこと」は下回った。特に、経験したことや想像したことなどから書くことを見つけ、文章を書くことに苦手意識が見られ、結果としても22ポイント下回った。 学 定期的に日記など文章を書く経験を積んできた。また、朝のスピーチを行い話す経験も積んでいる。	・書く力を高めるために、経験や想像したことを自分の言葉で書けるように、書く内容を明確に示す必要がある。 ・毎日の振り返り、自分の思ったことや考えたことを書く活動が必要である。	・全教科を通して自分の考えをノートやワークシートに書く指導をする。机間指導の時に考えを引き出すようにする。 ・国語科では、三部構成を徹底し、何を書くか明確に指示する。 ・その日のことを振り返る「振り返りジャーナル」を毎日書き、担任からもフィードバックを行うようにする。	・ワークシートを作成し、児童が自分の考えを書きやすいよう形式を工夫したが、学習内容の定着には個人差がある。今後も、ワークシートの改良を図る。 ・児童がノートに考えを書く際には、3段落で書く指導を続けている。まだ定着していないため、指導を続けていく。 ・4月当初に比べ、児童の書く量は増えている。担任の価値付けにより、意欲的に活動できる場が増えているため、今後も続けていく。	・ワークシートの工夫、個別の声掛けや書く内容を明確にした指導を行うことで、経験したことや想像したことを自分の言葉で書くことができる児童が増えた。学習の定着度には個人差があるため、今後もワークシートと書くことを明確にするなど支援を継続する。 ・三部構成を明確にして指導したが、定着が不十分であるため、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして文章の構成を考えることができるよう引き続き指導する。 ・毎日の振り返りと各教科で書くことを指導しているが、学習の定着度に個人差があるため今後も指導を継続する。
	算数	調 新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ったが、「長さ・かさ」は目標を下回った。特に、水のかさについては、mLやdLの単位については、およその見当を付け、単位を適切に選択して測定することに苦手意識がある。 学 計算力は身に付いているが、場面を式に表わしたり、式を読み取ったりすることが苦手な児童が多い。	・「長さ・かさ」は、およその見当を付けるために、実物を使って「長さ・かさ」の単位が目に見えて分かるようにする必要がある。 ・場面を式に表すことや式を読み取れるようにするために、立式の意味を考えさせる必要がある。	・mLやdLの単位を適切に選択できるように、物差しや水を使用し、具体的な操作活動を取り入れる。また、ワークシートで振り返り、定着を図る。 ・文章問題の必要な言葉に線を引き、立式するときには活用する。一つ分×いくつ分の定着を図るために、数字の立式だけではなく言葉の式や数直線図等で表現させる。	・具体物を操作する活動を取り入れてきた成果が、ワークテストの結果に表れてきている。今後も、継続する。単元の終わりには、教科書やプリントの問題を行くことで、学習内容を定着させることができているので継続する。 ・文章問題を解く際には、分かっていること・求めることを整理するよう丁寧に指導するとともに言葉の式も確認するよう指導しているが、定着には個人差がある。今後は、掲示物での工夫をしていく。	・具体物操作する活動を取り入れたことで、「長さ・かさ」に対する数量感覚を養うことができた。 ・文章問題では必ず言葉の式、数直線、図などで表現できるように指導してきた。様々な方法で立式の意味を考えることができる児童が増えた。学習内容の定着には個人差があるため、具体物を掲示し、問題の内容や問題場面の状況を理解できるよう指導する。

4	国語	調新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ったが、「書くこと」は目標を下回った。一方で、「話すこと・聞くこと」は上回っている。昨年度の取組が結果に表れたといえる。 学自分の考えや意見を発表する児童が限られている。	・書く力を高めるために、内容の中心を明確にしたうえで、自分の考えを積極的に言葉にできるようにする必要がある。 ・自分の考えや意見を相手に伝えるために、語彙を増やす活動をしていく必要がある。	・国語の教科に限定せず、全教科を通して自分の意見をノートやワークシートに書く指導を行い、発表する機会を多く設ける。また、机間指導を行って、話し言葉で意見を引き出したり、出来ている児童の書いた意見を価値付けしたりする。 ・漢字だけでなく、言葉やその意味など、語彙を増やす活動を多く取り入れる。東京ベーシック・ドリルや補助教材を活用していく。	・各教科等の学習で、自分の考えや振り返りを書くことで書くことに抵抗は少なくなったが、内容や文量に個人差がある。今後は、机間指導をさらに充実させ、 ・これまで、必要に応じて国語辞典を活用し、言語事項の学習を丁寧に指導してきた。児童の語彙を増やすことについては、まだ課題が残る。今後は、東京ベーシック・ドリルを活用し、知識・技能の定着を目指す。	・机間指導、個別指導を丁寧に行い、書くことの学習内容を定着させることができた。今後は、構成を考えて文章を書いたり、書いた文章を見直し、推敲したりする力も伸ばしていくための時間を確保していくことを継続する。 ・タブレット端末を活用することで、多くの児童が自分の考えを表現したり、発表したりする機会を増やすことができた。今後も自分の考えを相手に分かりやすく自信をもって伝えるための語彙の習得を図る。
	算数	調新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ったが、「たし算・ひき算」は目標を下回った。一方で、「かけ算」は10.1ポイント、「わり算」は3.9ポイント目標より上回っている。 学指示がないとノートを取ることができないなど細かな支援を必要とする児童がいる。	・基本的な計算の仕方は身に付いているが、見直す習慣を定着させる必要がある。 ・ICTを用いたり、大切なことをカードに書いたりするなど、視覚的にとらえやすいよう指導をする必要がある。	・ベーシックドリルやフォローアップワークシートを活用して、繰り返し問題を解かせる。つまずきのある児童には、放課後学習など補充学習を利用して指導する。 ・新しい単元の学習前に既習内容の時間をとることで基本的な知識・技能を身に付けさせる。	・つまずきのある児童には放課後学習等における個別指導で学習の補充を行うことができた。今後は、東京ベーシック・ドリルやフォローアップワークシートを活用し、正確に計算する力が定着するようにしていく。 ・レディネステストの解説を丁寧に行ったリ、習熟度に応じて単元の導入で既習内容の復習を行ったりすることで、スムーズに新しい単元の学習に取り組むことができ、細かな支援を必要とする児童もいる。今後も、タブレット端末を活用し、児童が基本的な知識・技能を身に付けることができるよう指導する。	・デジタルドリルで繰り返し問題を解くことで、計算する力は定着してきたが、まだ学習の内容の定着度には個人差がある。習熟度に応じた東京ベーシック・ドリルやフォローアップワークシートを継続していくことが必要である。 ・習熟度に応じて、既習の学習内容の復習を行い、ワークシートを活用することで学習活動への抵抗を少なくすることができ、意欲を高めることができた。個別の支援を必要とする児童には、放課後学習教室などの機会を活用し、必要に応じて個別指導を行う。
5	国語	調新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ったが、「指定された長さでの作文、事実を基にして自分の考えを書き表す作文」は目標を下回った。 学自分の考えを書き表すために、担任や友達と対話しながら構想を考え、組み立てるための丁寧な指導が必要である。	・文字数や長さを指定された長い文章を書くことに苦手意識があるため、反復練習を行う必要がある。 ・話をよく聞いて、学習のめあてを理解したり、学習の流れや完成形のイメージをもったりして学習に取り組む姿勢を身に付ける必要がある。	・各教科において、振り返りや学習のまとめを自分の言葉で書くようにし、指導を積み重ねていく。 ・ペアやグループで協働して課題解決に臨めるよう、学習形態を工夫し、学びに向かう力を養っていく。	・振り返りや学習のまとめを自分の言葉で書くよう指導を積み重ねてきたが、一人ひとりが書く内容や文量に差がある。今後は、文字数を指定して文章を書くことができるようにしていく。 ・学習形態を工夫し、ペアで協働して課題解決に取り組めるようにしてきた。今後は、グループで協働できるように指導を積み重ねていく。	・振り返りや学習のまとめを書く活動を行ってきたことにより、自分の思いや考えを文章で表現する習慣が身に付いた。今後は、表現力を高めるため、言葉の精選や、文章構成のレパートリーを増やしていきたい。 ・ペアやグループで協働する学習形態を取り入れたことで、学習に取り組む意欲が高まった。今後は、掘んだゴールイメージに近づく方法を思考させたり、粘り強く課題に取り組む姿勢を身に付けることができるよう指導する。
	算数	調新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回っている。「作図」だけは目標を下回った。 学既習の内容をもとに、自分なりの問題解決を試みることができるが、計算の習熟度に個人差がある。	・過程を大切に、途中式や作図の線を残して、「どうしてそうなったのか」を説明する力を高める必要がある。 ・演算処理や習熟度に応じた指導をしていく必要がある。	・自力解決の時間を十分に確保し、課題に対して丁寧に取り組めるように指導する。その後、ICTを活用したり、友達と作図の過程を説明し合う活動を通して学習内容の理解を深めるような授業を展開する。 ・習熟度に応じた課題に児童一人ひとりが向き合えるようにし、朝学習や放課後の時間もパワーアップドリルや東京ベーシック・ドリルを活用しながら、思考力を高める指導を行っていく。	・作図の過程を大切にするよう指導を積み重ねることで、児童の思考力は高まった。今後は、正確に作図ができる技能を身に付けさせることができるよう、繰り返し練習問題に取り組ませしていく。 ・習熟度に応じた指導を行ってきたが、パワーアップドリルや東京ベーシック・ドリルの活用はできなかった。朝学習や放課後補習の時間は、デジタルドリルも含め、必ずドリル学習に取り組ませるようにする。	・作図の過程を大切にする指導することで、児童の思考力は高まった。今後は、その思考力を正確に表現することができるよう、作図の技能を高めていく必要がある。 ・デジタルドリルや東京ベーシック・ドリルの活用を進めることで、習熟度に応じた指導を行うことができた。今後は発展的な課題に取り組ませることで、さらに学習への意欲を高めていく。

6	国語	調領域「情報の扱い方に関する事項」の正答率は、目標値には2ポイント下回る結果となった。 調領域「書くこと」の正答率は、令和元年度は目標値を12ポイント上回っていたが、令和2年度は、4ポイント下回る結果となった。しかし、誤答傾向を見ると、無解答の割合は昨年度より減っているので取り組もうとする意欲は見られる。 学漢字の書き取りや自分の意見を書く活動では個人差が見られる。学習活動において書くことを積極的に取り入れるなど、引き続き工夫が必要である。	・情報化社会である現代において、膨大な情報の中から必要な情報を取捨選択して得ることや、情報同士の関係を捉え自分の発信したいことを表現する力を伸ばしていく必要がある。 ・限られた文字数や、決められたテーマに基づき考えをまとめて書くことができるよう指導する必要がある。 ・既習の漢字を正確に書き取る力を伸ばす必要がある。	・情報と情報との関連付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解して使えるように思考ツールを活用した授業を行う。 ・朝学習の時間において、限られた文字数や決められたテーマで記述する取組を行う。 ・单元ごとに実施する漢字小テストを行い、習熟度の確認をする。デジタルドリルを活用し、繰り返し練習を行わせる。	・思考ツールを活用すると、普段文章を書くことを苦手としている児童も200時程度の整った文章を書けるようになった。今後も「書くこと」单元では積極的に取り入れていく。 ・朝学習での取組は不十分だったが、通常の授業時に「書く」活動を取り入れた。その結果、約8割の児童が抵抗感なく取り組むことができた。今後は、朝学習時にも積極的に取り組ませていく。 ・デジタルドリルで、ほぼ毎日練習を行わせた。その結果、漢字の習熟テストでは約8割の児童が、達成度8割を超えることができた。	・文章の構成を意識しながら書こうとする児童が増えた。約6割の児童が「はじめ、中、終わり」の構成を意識して文章を書くことができた。 ・約8割の児童が400字程度で自分の考えを書けるようになった。思考ツールに加え、モデル文を提示することで書くことに対して苦手意識をもつ児童も文章が書けるようになった。 ・年間を通して、デジタルドリルに取り組ませた。漢字の習熟テストでは、9割の児童が達成度8割を超えることができた。整った字を書くという指導が難しいため、紙ベースでの課題にも取り組ませ、指導する。
	算数	調全領域において目標値も上回り、区の平均正答率も上回った。領域別正答率でみると「数と計算」の区平均・目標値は上回るものの、問題の内容別正答率において「分数と小数」が区平均を2ポイント下回っている。 学計算をする技能は身に付いているが、文章問題になると演算決定をすることが苦手な児童がいる。	・単位量より小さい端数をとらえて分数に表すこと、単位分数を用いて量を表すこと、分数の加減計算をできるよう指導する必要がある。 ・各演算の意味を理解し、これに基づいて、問題場面に即して正しく演算決定を行う力をのばす必要がある。	・分数の乗法・除法の学習前に振り返りの時間をとること、朝学習の時間に第5学年の内容の復習を行うことで分数と小数についての基礎基本的な内容を身に付けさせる。 ・問題場面と図と式を関連付けて考える活動や、式から数量関係を読み取るといった活動に取り組む。	・朝学習や宿題で、既習事項に関するデジタルドリルに取り組ませた。授業で学習中の单元に関連する既習事項を復習させることで、苦手意識をもった児童がスムーズに学習に向かうことができた。 ・図や表を手掛かりにすれば立式できる児童が多いため、文章問題に取り組む際には、読み取った情報をもとに図や表を描いてから考える活動を多く取り入れた。問題文から読み取ったことを図や表に整理することに課題がある児童もいるため、継続して指導する。	・デジタルドリルを、家庭学習や授業で取り組ませた。全体としての学習内容が定着していない单元について、家庭学習で取り組ませた結果、算数に苦手意識をもつ児童の学習内容に対する理解度が高まった。 ・立式させる際に、絵や図等を活用して自分で立式できるよう指導した。特に少人数算数のマスターコースでは、問題文を読み、数直線図に数値を書き込む学習を中心に行った。立式しようとするしなかった児童が自分の考えを書けるようになった。
音楽	学	・音楽活動に対しても概ね前向きに取り組んでいる。特に打楽器を中心とした合奏に意欲的に取り組んでいる児童が多い。	・コロナ禍であるが、感染防止策を講じながら、意欲を伸ばせるように取り組む。	・感染防止対策をしながら、歌唱や管楽器の活動にも取り組むことができるようにする。	・音楽会に向けて、友達と音を合わせて演奏に意欲的に取り組む児童が多い。和楽器を含めた様々な楽器の演奏を体験できるように支援する。	・児童が、自分で担当する楽器やパートを選択し合奏に参加し、感染予防対策を行いながらリコーダーや篠笛、箏の演奏を行った。児童がめあてをもち、自ら演奏に取り組み、意欲をもって学習することができた。
	学	・曲想と音楽の構造の関わりに気付き表現を工夫することは苦手な児童がいる。	・曲想と音楽の構造の関わりに気付き、音楽を聴いたり、音楽をつくったり、表現を工夫したりする力を伸ばす必要がある。	・シンキングチャートやICT機器を活用した音楽づくりや鑑賞などの活動を通して、音楽の構造についての知識、理解を深め、曲想との関わりに気付くことができるようにする。	・よりよい演奏を目指せるように、児童が指揮をしたり、友達とお互いの演奏を聴き合ったりする活動を通して、客観的に自分の演奏について振り返ることができるよう支援する	・シンキングチャートICT機器を活用して、音楽づくりや鑑賞の授業に取り組み、曲想と音楽構造の関わりについて学習することで、表現を工夫する力が伸びた。今後も継続して行う。
図工	学	・課題には、前向きに取り組んでいる。失敗を気にしたり、制作途中の作品を中断し、新たな材料でやり直しをしようしたり、自分の作品に自信がもてない様子が見られた。	・自分の感覚や行為を通して、見方や考え方を広げられる視点を持ち、新たな価値を柔軟に創り出していくことに慣れていく必要がある。	・活動の過程で、新たな視点がもてるように、材料との関わりを更に深めたり、お互いの作品を見合う場を適宜取り入れたりし、いろいろな表現を認め合う態度を育成する。	・題材によって、段階的に材料の種類や量を増やしたり、他の方法を伝えたりして意欲を高め、関わりを深める手立てとした。また、いろいろな表現を認め合う態度を育成するために、お互いの作品を見合う方法の一つにタブレット端末を引き続き、活用していく。	・いろいろな用具や材料と関わる機会や、児童同士の作品を鑑賞し合う機会を設定し、図工科における見方や考え方を働かせながら学習をすることができた。今後も新たな価値や意味を柔軟に創り出していくことに慣れていくよう指導の工夫をする。
	学	・自他の表現を受け入れながら、他者の気持ちを考えたり、思いを伝え合ったりして、つくる楽しさを味わう経験が、まだ浅い様子も見られた。	・コロナ禍での感染防止策をとりながら、可能な限り、児童同士の関わり合いを深める造形活動を取り入れ、児童の主体性や寛容性を育む必要がある。	・造形活動を通して、譲り合うことや他者の気持ちを考えながら制作することで、みんなが気持ちよく取り組めることを伝える。いろいろな表し方ができる雰囲気大切にしながら、創り出す楽しさを実感できる題材の工夫をする。	・材料や用具を譲り合うことや他者の気持ちを考えながら制作することを、継続して指導してきたので、みんなが気持ちよく取り組めるようになってきた。主題を押さえつつ、個々が表現の楽しさを味わえるように、個別の支援や言葉掛けを継続する。	・学習課題から、自分の表現したいことを見付けられる児童が増え、主体的に学ぶ態度が身に付いた。今後も、児童が意欲をもって取り組める題材を設定し、指導をしていく。